

## 2.2 「Do for Smile @東日本」プロジェクト 陸前高田復興支援プログラム

### 活動の転換期を迎えて

今年度も多くの方々のご理解とご協力で、陸前高田での活動を続けることができたことに、まず感謝を申し上げたい。

津波により大きな被害を受けた沿岸部のかさ上げのために山を切り崩して土砂を運んでいたベルトコンベヤーがその役割を終え、いくつもの頭をもつ大蛇のような姿が、あっという間にほぼ解体されるなど、陸前高田の新たなまちづくりにむけて、ハード面で大きな変化があったような気がしている。

かさ上げ工事などのため、津波の被害を子どもたちに視覚で訴えられるのはタピック（道の駅）や気仙中学校など震災遺構として保存される予定の建物など一部となり、沿岸部は「巨大な工事現場」の様相を呈している。その中で、2012年度から毎年夏に実施している、市外在住の小学4～6年生を対象としたスタディツアー「かわいい子には旅をさせよ」（かわ旅）で、参加者に東日本大震災を通して災害の恐ろしさを伝え、防災意識を育てうるか、学生たちは今年度とくに大いに悩むこととなった。

また、震災についてだけでなく、豊かな自然と歴史のある陸前高田の魅力を子どもたちに知ってもらおうとさまざまな工夫を凝らし、また陸前高田の人々との出会い・交流プログラムなど盛りだくさんの「かわ旅」ではあったが、「参加者を集める」という点では今までにも増して厳しさを感じる年となり、学生たちの活動が一つの転換期に来たと感じている。

活動が転換期に来たという点については、内的要因も関係している。2012年から活動してきた本セッションで、「最後の初期メンバー」が今年3月卒業する。「かわ旅」をどう作るかという「生みの苦しみ」を知る学生と、毎年変更はあるものの、「先輩が作ったかわ旅をどう続けるか」に重きをおく学生との間では、どうしても陸前高田への向き合い方も変わる。自分たちのミッションのために「続けてきたことをやめる」という決断がなかなかできず、下手すると「続ける」ことにのみ意義を見いだす恐れがある。

そこで、次年度はいったん「かわ旅」は実施しないことを決断し、学生たちにはこれからの一年間、陸前高田で何がしたいか考え直す一年にしようとして提案した。学生たちはいきなり活動の柱を失うことにとまどいも大きいと思う。協力してくださっている組織や個人の方々へは陸前高田を訪問し直接ご説明して、ご理解を得られたと思う。

3月に入り、「Do for Smile @東日本」プロジェクトに所属する学生を対象に、ドキュメンタリー「あの街に桜が咲けば」を制作した小川光一監督をお呼びして、上映会およびワークショップを実施した。今までの活動を振り返り、改めてこれから何ができるか考える大きなきっかけとなった1日であった。

「震災の風化防止」と「防災の大切さの啓発」、そして「陸前高田の町や人の魅力を伝える」という3つの柱はそのままに、次年度は、改めて「復興」とは何か、学生ができることは何かを市内の皆さ

んや学生とともに考えてゆく一年としたい。

(ボランティアコーディネーター 中原美香)

## 学生からの報告

### スタディツアー「かわいい子には旅をさせよ」

ツアー日程	2015年8月5日(水)～8日(土)
活動場所	岩手県陸前高田市
活動内容	関東圏の小学生を対象とした スタディツアーの企画・運営
参加人数	学生メンバー10人、小学生6人



#### <行程>

- 1日目：被災地見学・講話・バーベキュー
- 2日目：火起こし・避難体験・現地の方との昼食作り・被災地ツアー・講話・ボランティア体験
- 3日目：モノづくり体験・流しそうめん・陸前高田市長講話・七夕まつり参加
- 4日目：現地の小学生との交流（砂金採り）

2012年に最初のツアーをおこなってから、今回で4回目の「かわ旅」となった。震災を未来の世代に伝え風化させない、ということを目的の一つに活動を続けてきたが、参加者数の減少などから風化が進んでいると改めて感じた。

今までで最も少ない人数での催行となった今回のツアーだったが、新たなプログラムを加え、子どもたちがより多くのことを学び考えるだけでなく、私たち学生メンバーにとっても今後の活動についての大きなヒントを得る機会となった。

特に砂金採りでの交流は、以前より考えていた「被災地としてではない陸前高田市を学ぶこと」と「交流を通じて人と人とのつながりをつくること」の二つを両立させることができるプログラムになると実現を喜んだ。しかし、実際は初対面の子どもたちと、関東の子どもたちとの間でうまくコミュニケーションを取らせてあげることができず、「交流」の難しさを痛感した。

また今回、砂金採りでの交流をはじめ、多くのプログラムの企画において陸前高田市観光物産協会の副会長をはじめとした多くの方々に、さまざまなご提案とアドバイスをいただいた。震災直後から変化し続けている陸前高田市でこれから活動を続けていくにあたり、今後はこれまで以上に多くの企画・アイデアを提案できるような知識と柔軟性を持っていかなければならないと感じている。

(学生メンバー 国際学部国際学科)